

心身症治療・がん緩和ケアにおける漢方治療

近畿大学医学部 内科学教室 心療内科部門/近畿大学病院 心療内科・緩和ケア科

教授 小山 敦子 先生

1982年 島根医科大学医学部(現 島根大学医学部) 卒業
1986年 近畿大学医学部第三内科学教室(1995年 同講師)
1999年 近畿大学医学部堺病院 心療内科 講師
(2012年 同教授)
2013年 近畿大学医学部内科学 腫瘍内科部門心療内科分野/
同大学院医学研究科医学系臨床医学系分野
緩和医療学 教授
2015年 近畿大学医学部内科学 心療内科部門 教授



准教授 松岡 弘道 先生

2002年 奈良県立医科大学医学部 卒業
2008年 近畿大学医学部堺病院心療内科 助教(緩和ケア担当)
2011年 近畿大学医学部附属病院腫瘍内科 助教
2013年 近畿大学医学部附属病院がんセンター
緩和ケアセンター 講師
2019年 近畿大学医学部内科学心療内科部門准教授・医局長/
同病院がんセンター緩和ケアセンター兼務



ストレスに満ち溢れた現代社会においてストレス関連疾患を抱える患者は多い。また、がん患者においては治療法の発達に伴い緩和ケアの役割が非常に大きくなっている。近畿大学医学部内科学教室 心療内科部門は、全国でも数少ない心療内科として独立した医学部の講座の一つとして、心身症からがん緩和ケアを含めた幅広い領域をカバーし、さらに“全人的な医療”の実践のために漢方治療を幅広く取り入れておられる。そこで、同講座の小山敦子教授、松岡弘道准教授に、心身症治療・がん緩和ケアにおける漢方治療の実際と漢方薬の可能性について伺った。

全国でも数少ない心療内科学講座として

小山 本講座は2015年に開設されましたが、その歴史は1980年代に遡ります。当時、呼吸器・アレルギー疾患を専門とする第4内科学講座(元、中島重徳教授)で、心身症グループが心身症の診療・研究を行っていました。

当時、血液疾患を専門とする第3内科学講座で白血病や悪性リンパ腫などの血液疾患の診療・研究に従事していた私は、骨髄移植患者さんのメンタルケアやご家族のサポートというような、いわば“隙間”を埋める医療に興味があり、第4内科に院内留学して心身医療の研鑽を積み、1999年に開院した近畿大学医学部堺病院に開設された「心療内科」に赴任しました。

その後、2013年に内科学腫瘍内科部門心療内科分野が本学に開設され、近畿大学附属病院では「心療内科・緩和ケア科」として新体制がスタートし、2015年には内科学教室心療内科部門として独立しました。

“病を持っている人を診る”を基本に

小山 心身医学は“病”を診るのではなく、“病を持っている人”を診る、心理社会的背景からその患者さんを取り巻

く環境を含めて、心身両面からその患者さんが病と付き合いながら今後の人生をどのように切り開いていくかを一緒に考え、実践する学問です。

ひとつ“病”に見舞われると身体的苦痛、心理的苦痛、社会的苦痛、スピリチュアルペインが相互に関連して、「Total pain(全人的苦痛)」をもたらします。そこで、医療者側も全人的医療の実践が必要となります。Total painをもたらす代表的な疾患が「がん」です。われわれはこのような見地から、心身症だけでなくサイコオンコロジー・緩和ケアの領域にも積極的に取り組んでいます。

漢方は心療内科において親和性が高い

松岡 心療内科領域において、漢方は非常に親和性が高いと言えます。たとえば、過敏性腸症候群や機能的ディスペプシアのように器質的な異常はないにもかかわらず消化器症状を訴えるような場合、西洋医学的治療ではそれぞれの症状に応じた治療薬が必要ですが、漢方治療では一剤で総合的に有効であるという利点があります。

当科では痛みを訴える患者さんを診る機会が多くありますが、上肢の痛みにも五苓散、冷えを伴う慢性疼痛に当帰四逆加呉茱萸生姜湯などの漢方薬を使用しています。その

他にも、女性の不定愁訴に加味逍遙散、瘀血に桃核承気湯・桂枝茯苓丸、月経関連の不定愁訴に芍婦調血飲、不眠に酸棗仁湯や加味帰脾湯、めまいに半夏白朮天麻湯、咽喉頭異常感症に半夏厚朴湯、パニック発作のふらつきに苓桂朮甘湯というように漢方薬がカバーできる範囲は広く、患者さんからも非常に喜ばれます。

小山 患者さんは症状が多彩ですから、西洋医学的に個々の症状をピンポイントで治療することを考えると薬剤も多くなります。その点で患者さんの全体像を診て治療方針を決める漢方治療は当科領域との親和性が高いと言えます。

さらに、患者さんのどのような要素が複合して現在の症状が形成されたのかを考え、その情報を患者さんと共有して、薬も含めてどのように対応していくかを検討します。つまり、患者さんの生活習慣や物の考え方などを含めて病態を整理し、患者さん自身にも変えられるところは変えていただきます。そして、その手助けに薬物療法があると考えています。

治療には心理士や食事に関しては栄養士、というように多職種の協力が必要です。われわれ医師はチーム医療を円滑に推進することが大切だと思っています。

がん緩和ケアにおける漢方治療

松岡 がん緩和ケアにおいても漢方薬は広く用いられます。口内炎に半夏瀉心湯、がん化学療法に伴うしびれに牛車腎気丸、倦怠感などに人參養榮湯などの補剤、治療困難な浮腫に五苓散、せん妄などの認知症関連症状には抑肝散加陳皮半夏などが有用です。

がん疼痛の治療はオピオイドが主になりますが、Chemical copingが最近話題になっていることから、われわれはがん患者さんの“がん性疼痛”と“非がん痛”を見極めて治療を考える必要があると思っています。

われわれは数ある漢方薬の中でも人參養榮湯に注目しています。人參養榮湯は、がん患者さんで疲労感や倦怠感を有する方、気虚・血虚の患者さんに有効です。しかし、どのようなタイプの患者さんに有効かというエビデンスがないことから、人參養榮湯の効果をがん患者さんと非がん患者さんでトータルに検討しようと考えています。たとえば、訴える症状が同じであっても、がん患者さんと非がん患者さんで人參養榮湯の効き方に違いがあるかもしれません。

人參養榮湯に限らず漢方薬のエビデンスはまだ不足していますので、このような検討の成果も重要なエビデンス



(近畿大学医学部・病院事務局ご提供)

になると期待されます。そして、たとえ小さくてもエビデンスを着実に蓄積し、発信していきたいと考えています。

これからの心身症治療・がん緩和ケアにおける漢方薬

小山 画像診断などにAIが活用されようとしているように、医療革新は急速に進んでいます。しかし、患者さんの心理社会面も加味してトータルに診ること、すなわち“全人的医療”は人間の医師にしかできません。そして、漢方治療はまさに全人的医療を実践するために不可欠であり、これからさらに応用される範囲が広まるものと思っています。

人間を診る医療が発展するために大学の心療内科学講座はオピニオンリーダーの立場で、全人的医療全体の底上げと拡大に貢献していきたいと考えています。



心療内科を支えるスタッフ(小山敦子先生ご提供)

心療内科のシンボルマーク：mind(m)とbody(b)、その両方に血の通った医療の実践を意味する。



取材：株式会社メディカルパブリッシャー 編集部 写真：直江竜也